

大空小学校の始まり。 20年の膠着をひっくり返した一声

地域に受け入れられず「分校」になった新設校

大空小は大阪市住吉区にある公立小学校だ。2012年時点で、児童数は約220人。そのうち、特別支援の対象となる児童数は30人を超えている。彼らは特別なクラスにくくられることなく、すべての子どもたちが同じ教室で学んでいる。これが大空小の大きな特徴のひとつだ。

ほかの学校では居場所がない子どもを受け入れてくれる——そんなウワサは口コミで広がり、大空小には全国から、「問題児」と見なされた子どもたちが集まってきた。にもかかわらず、開校から現在（取材当時、2015年時点）に至るまで大空小で不登校のまま卒業した児童の数は「ゼロ」。それは、開校当時の校長である木村泰子先生のリーダーシップもさることながら、教職員や保護者の皆さん、そして地域の住民が「丸」となって学校づくりにコミットしているからこそ実現しているのだ。僕は「大空小が「2030年の学校」のあるべき姿のひとつではないかと、強く感じている。

大空小学校の歴史はきわめて短い。開校は2006年4月で、できてから15年足らずの新設校である。今でこそ地域住民の熱心な応援を支えられている大空小だが、設立から現在までの道のりは、木村先生の話を聞くと波乱万丈なものだった。

その昔、大空小のある学区には小学校が一つしかなかった。児童の数が増え続けていたため「このままではパンクしてしまう」という懸念があり、行政は同学区内に新しい学校をつくろうと動き始めた。しかし、2003年によくできたのは新設の独立した学校ではなく、元からあったマンモス小学校の分校だった。その理由を、木村先生が説明してくれた。

「地域の保護者が新設の学校に行くことを拒否したからです。行政が新校の設立に向けて学区の再編をしようとしたのですが、「なんで自分の子どもが動かなアカンのか」「向こうの地区が拒否した学校になんか行かせたくない」と、誰も新校に行きたがらない……そんな反対運動が20年間ずっと続いていました。それで行政はあきらめて、新しい校舎をもとからあった小学校の分校と位置づけ、5〜6年生だけをそちらに通わせるようにしたんですよ」

分校ができてから3年経ったタイミングで、木村先生はこのマンモス小学校に校長として赴任した。地域に充滿する負の感情を肌で感じて「このままでは子どもたちのためにならない」と切実に思った木村先生は、この空気をぶち壊すべく、新校復活に向けて動き出した。

積年のしがらみ、風穴を開けた何でもない言葉

白紙になった新校の話を再び復活させるには、地域住民の同意が不可欠だ。木村先生は地域住民のリーダーたちが一堂に会する集いがあると聞きつけ、彼らを説得するべくその場に単身で乗りこ

んでいった。

「行政の人には止められたんですよ、「行っても泣かされて帰ってくるのがオチやから」って。私は「こっちが弱い女の子ですし、命までは取られないでしょう」と返したんですけど(笑)」

集会の当日、木村先生が指定された会議室に入ると、そこには「新しい校長はどんなサツや？」と品定めをするように見てくる住人たちが、ずらりと並んでいた。

木村先生はひりつくような空気を、底抜けに明るいまえさつで吹き飛ばした。

「木村でーすー！ 新しく校長として赴任しました、皆さんよろしくー！」

第一声で会議室の雰囲気が変わったところで、木村先生は最も伝えたかった言葉をストレートに投げかけた。

「みんなで新しい学校を、いい学校をつくりましょう！！」

誰もが様子伺うように、シンと静まり返った会場。しかし次の瞬間、ドッと拍手で包まれた。リーダーの取りまとめをしていた男性からの「校長、よう言うた！ 手伝うで！」という声援を皮切りに、あちこちから「みんな、ええ学校つくろうやー」と声が上がった。20年間この地域を苦しめてきた負の空気を、木村先生はたった一言でひっくり返ってしまったのだ。ここから、分校が「大空小学校」として生まれ変わる物語が動き出す。

積年のしがらみを越えて、地域のリーダーたちは新しい学校づくりに意欲を見せ始めた。これに驚いたのは行政側の人々だった。彼らは口をそろえて「一度白紙にした新校の話を、今さら元に戻

すことはできない」と言った。そんななかでリーダーシップを発揮して空気を変えたのは、当時の住吉区の区長であった西澤由美子さんだ。

木村先生は西澤区長に「新校、どれだけ待てる？」と問われた。それに対して木村先生は「1年しか待てません」と言ったそうだが、なんとも強気な姿勢だ(笑)。

西澤区長は木村先生の思いを受け取り「新しい学校をつくろう」という不退転の決意で、行政内の調整に取りかかった。そして見事、1年間で新校の開校準備をやったのだ。木村先生も「区長の存在がなければ、大空小は生まれれていなかった」と語る。このように、大空小が開校する前にはいくつものドラマがあった。

誰もが、子どものためにいい大人でありたい

僕はここまでの話で、ひとつ大きな疑問があった。「20年間反対し続けていた地域の総意が、なぜ木村先生の一声で変わったのか」ということだ。それを尋ねてみると、木村先生は「きつと、みんな本当は、どうにかしたかったのだ」と言う。

「やっぱり大人は、最終的に『子どものためにいい大人でありたい』という気持ちを根底に持っているんです。でもときに、感情や世間体が邪魔をして『何が一番子どものためになるのか』を見失ってしまう。私は、20年間で積もり積もっていた感情を取っ払って『みんなでない大人になりま